

教職大学院における実習のカリキュラム評価

■ 岡田 倫代 (高知大学)
■ 森 有希 (高知大学)
■ 永野 隆史 (高知大学)
■ 柳林 信彦 (高知大学)

■ 野村 幸代 (高知大学)
■ 柴 英里 (高知大学)
■ 三好 文 (高知県教育委員会事務局)

キーワード：教職大学院における実習 カリキュラム
理論と実践の融合 大学院生の省察

I はじめに

本学教職実践高度化専攻は、2018年4月に設置された新設の教職大学院【専門職学位課程】である。現時点(2019年9月)は、2020年3月の完成年度に向け、計画していたカリキュラムの4分の3が終了しつつあるところである。

周知のように、教職大学院は、既設の修士課程教育学専攻とは異なり、高度職業人の育成が大きな目的となっている。研究の集大成である修士論文が必要では無い代わりに実習10単位を履修することが課されていることなどが、その特徴をよく示しているだろう。こうしたことから、教職大学院における学びは、既設の修士課程における学びとは大きく異なるものが準備される必要がある、それらは、「理論と実践の往還」といった形で示されている。本専攻も理念のひとつとして「教育／教育実践を科学する(理論と実践の融合)」を掲げており、大学院という閉じた場で理論だけを学ぶのでは無い、学校現場において実践を積み重ねていくだけでも無い、両者を学び、深い省察活動によって両者を融合させることを試みている。

以上のように、教職大学院には、その特質から理論と実践の融合(往還)を実現させ得るような、新たな

学びの形成が求められている。その中核は、本専攻の開講科目で言えば、教育実習と総合実践力科目群であるが、当然、それらの科目がこうした目的を達成できるものとなっているのかを不断に問う必要があり、また、そうした検証の結果に基づいて、内容を継続的に改善していくことが求められる。そうした際に有効な方策が、カリキュラム評価の実施である。

カリキュラム評価は、教育の質の改善に不可欠な行為である。カリキュラム評価によって、少なくとも次の3つが可能になる。第1に、教育目標の達成状況を把握できる、第2に、達成されていない目標についてその原因を探ることができる、第3に、原因把握から改善への道筋を明確にできる。カリキュラム評価は「現状の把握→課題の発見→原因解明→改善提案→結果追跡」という一連の流れであり、教育の成果の確認とともに、教育の質を高めていくものである(田中, 2009)。教師教育のカリキュラムを開発するためには、教師自身がアイデンティティを形成する中で研修(あるいは実習)をどのように意味づけているかを把握し、その結果をカリキュラムの改善に生かすことが必要である(浅野, 2009)。

以上から、本研究では、教職大学院における理論と実践の融合(往還)の中核の一つである実習を取り上げ、1年次の実習Ⅰから2年次前期の実習Ⅱに至る現状を分析し、実習の意義や成果を検討し、カリキュラ

ム評価を実施することにより、課題と改善につなげるための方向を見出すことを目的とする。

カリキュラムにおいても、カリキュラム経営の高度化とそのため PDCA サイクルの形成・実施が求められている中で、本研究は、専門職学位課程に設置された教職大学院という既設の修士課程とは異なる性格を持つ専攻におけるカリキュラム経営の在り方に一定の示唆を与えることができるという点で意義を主張できるだろう。

II 方法

1. 調査対象

教職大学院が開設された2018年度の入学院生(以下、院生)は、学校運営コース2名(男性1名、女性1名)、教育実践コース4名(男性1名、女性3名)及び特別支援教育コース7名(男性2名、女性5名)であり、この全13名(男性4名、女性9名)を対象とした。

2. 実施時期

第1回目は、実習Ⅰ終了後の2018年11月1日から11月20日であり、第2回目は、実習Ⅱ終了後の2019年8月21日から9月1日である。

3. 実施方法

教師教育カリキュラム評価に際しては、質問紙調査とインタビュー調査を組み合わせた追跡調査を実施することが提案されている(浅野, 2009)。質問紙調査については、各調査対象に対し、それぞれメールで回答を求めた。インタビュー調査については、質問紙調査の回答を受け、メールでの回答を求め、必要に応じて直接インタビューを実施した。

4. 質問紙調査及びインタビュー調査の内容

質問紙調査(森ら, 2019)については、実習Ⅰ及び実習Ⅱの仕組みや体制、指導の在り方、実習の取り組み状況や意義に関する項目、実習の取り組み状況に関する項目、総合的評価項目の合計21項目を設定した。

調査項目の概要(Figure 1)は、以下の通りであり、それを文章化した各項目について、「そう思う」「まあそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」(5件法)の中から一つを選択する方法とした。

インタビュー調査については、質問紙調査から得られた回答のうち、第1回目と第2回目に差が見られた項目について提示し、各院生の具体的取組について文章で回答してもらった。

- ・ 仕組み(時期、日数、目的、実習先、実習実施会議)
- ・ 情報共有・交流(実習の説明、Moodleの活用)
- ・ 連携指導(教職大学院、県、実習先の連携、主・副指導教員の連携)
- ・ 指導・支援(教職大学院、県、実習先からの指導・助言・支援)
- ・ 能力向上(教師としての資質・能力の向上への有用性)
- ・ 取組状況(見通し、計画、講義科目との関連、実習先の課題、県の課題、記録、発表、達成・成果、次年度の見通し)
- ・ 総合評価(実習の総合的な意義の実感)

Figure 1 調査項目の概要

5. 倫理的配慮

回答は、数値化して統計的に処理するため個人が特定されることはないことを依頼文書に記し、調査対象者に示し、回答用紙の提出をもって了解されたものと判断した。

6. 解析方法

解析には、統計解析ソフト IBM 社の SPSS Ver.26(日本アイ・ビー・エム株式会社)を用いた。まず正規性の検定(Shapiro-Wilk test)を実施し、正規性が認められなかったため、第1回目調査と第2回目調査の各項目における差をみるために、対応のある Wilcoxon signed rank test を実施した。有意水準は5%未満とした。

Ⅲ 結果

1. 実習に関するアンケート調査結果から見た院生の認識の変容

アンケート調査結果については、院生13名全員から回答が得られた。その結果、欠損値のある1項目を除き、第1回目調査と第2回目調査に対する院生への質問20項目のうち以下の7項目「実習に関して教職大学院からの説明・情報提供は十分なされていた」($p < 0.05$)、「実習は、教員としての資質・能力の向上に役立つものだった」($p < 0.05$)、「実習計画に沿って実習ができた」($p < 0.05$)、「実習以外の教職大学院の授業科目(ゼミ含む)との関連を図って実習ができた」($p < 0.05$)、「実習先の教職員と連携し、実習先の課題解決を図りながら実習ができた」($p < 0.05$)、「高知県の教育課題を意識した実習ができた」($p < 0.05$)及び実習等における研究成果発表の場である「土佐の皿鉢ゼミでは、それまでの実習の成果を発表することができた」($p < 0.05$)について有意差が認められ、上記の項目すべてにおいて第1回目より第2回目が高かった(Table 1)。

2. 実習に関するインタビュー調査から見た院生の認識の変容

実習に関するアンケート調査で得られた結果を元に、差が見られた以下の項目について院生へのインタビュー調査を実施した。その結果、11名の院生から回答が得られた。

「実習に関して教職大学院からの説明・情報提供は十分なされていた」について

○「実習Iを経験していたので、見通しが持っていたため、提出物の内容や提出期限等の事務連絡で十分であった。それらの情報提供が十分だった。」

○「4月当初の時点で実習説明のオリエンテーションがあったので、イメージを持って準備することができた。」

○「2年次ということもあり、実習校も勝手が分かっていたので、事前メールや実習会議での説明で、情報提供が十分だった。」

○「2回目の実習で、自身に実習Iの経験があったため、手続きや実習の流れ等で不明なことがなく、大学の説明や提供された情報で滞りなく実習を行うことができた。」

Table 1 実習に関するアンケートの各項目における第1回目調査と第2回目調査比較

項目	第1回		第2回		P-value
	Median	Inter-Quartile Range	Median	Inter-Quartile Range	
実習時期の適切さ	4.00	(4.00 – 4.00)	4.00	(3.00 – 4.50)	1.000
実習日数の適切さ	4.00	(3.50 – 4.00)	3.00	(3.00 – 5.00)	0.713
実習目的の適切さ	4.00	(4.00 – 5.00)	4.00	(4.00 – 5.00)	1.000
実習先の適切さ	5.00	(4.00 – 5.00)	5.00	(5.00 – 5.00)	0.059
実習実施会議の有益さ	4.00	(3.00 – 4.00)	4.00	(3.50 – 5.00)	0.190
教職大学院からの十分な実習説明	4.00	(4.00 – 4.00)	4.00	(4.00 – 5.00)	0.046
Moodleの有益さ	3.00	(3.00 – 4.00)	3.00	(2.00 – 3.00)	0.053
実習先指導者からの指導・助言	4.00	(4.00 – 4.50)	4.00	(4.00 – 5.00)	0.564
大学院指導教員からの指導・助言	5.00	(4.00 – 5.00)	5.00	(4.00 – 5.00)	0.414
資質・能力の向上	4.00	(4.00 – 5.00)	5.00	(4.50 – 5.00)	0.034
事前指導での実習の見通し	4.00	(3.50 – 5.00)	5.00	(4.00 – 5.00)	0.132
実習計画による実習達成	4.00	(4.00 – 4.50)	5.00	(4.00 – 5.00)	0.025
授業科目との関連達成	4.00	(3.00 – 4.00)	4.00	(4.00 – 5.00)	0.033
実習先と連携	3.00	(3.00 – 5.00)	5.00	(4.00 – 5.00)	0.013
高知県の教育課題を意識	4.00	(4.00 – 4.00)	4.00	(4.00 – 5.00)	0.046
実習記録の有益さ	4.00	(3.50 – 4.50)	4.00	(4.00 – 5.00)	0.279
皿鉢ゼミでの成果発表	4.00	(3.50 – 4.00)	4.00	(4.00 – 5.00)	0.020
自身の目標達成	4.00	(3.50 – 4.00)	4.00	(4.00 – 4.50)	0.059
後期実習への見通し	4.00	(3.50 – 4.00)	4.00	(4.00 – 5.00)	0.317
総合評価	4.00	(4.00 – 5.00)	5.00	(4.50 – 5.00)	0.059

- 「実習校の担当教員から、適切に情報提供がなされていたと伺っている。」
- 「昨年度は教職大学院自体がスタートしたこともあり、実習についての課題や取り決めに十分に把握することができなかった。また、在籍校とは異なる学校での実習であったことも重なり、実習前の準備が十分に行えなかった。しかし今年度は4月当初に説明会があり、準備や実習校との連絡がスムーズに行えた。」
- 「実習Ⅰを経験していたので、教職大学院からの説明で十分に理解することができた。」
- 「昨年度経験していることの継続なので、変更点や確認だけで十分だと思った。」
- 「実習Ⅱが、実習Ⅰとの違いを含め説明がされていたので、その視点を持ちながら実習に臨めた。また実習の形態についても1日実習に加え、半日実習も可となったことなどもよかった。」
- 「されていたと思うが、実習校での担当者から、私の指導教諭への伝達が不十分な部分があったみたいだったので、読んですぐわかるような資料があったらいいのかなと思った。しおりに項目付けするなど、実習生がしてもいいかもしれない。」

「実習は、教員としての資質・能力の向上に役立つものだった」について

- 「設定した実習課題は、学校現場で求められる技能やスキルに関するものなので、研究を進めていくことは、自ずから自身の教員としての資質・能力の向上に役立つものである。」
- 「学部の実習よりも長期で、授業だけでなく、組織、仕組みなどさらに深い部分での学びができた。」
- 「昨年、必修授業及び専門授業で学んだことを、実習場面で活用することができている。20数年実践してきたできなかったことを、この実習で経験することができおり、資質向上に大いに役立つものとなっている。」
- 「研究内容が教科指導に係るものであるため、実習があることで教科指導力を高めることや生徒理解につながったと考えている。」
- 「実習Ⅰの経験から実習Ⅱでは課題は何か、その課

題を探る糸口は何か、分析方法等を定めたり、見直しを持ったりすることが少しはできるようになっていると感じる。」

- 「実習内容は、在籍校での支援会議の実践に関するものであったが、児童の実態把握や有効な指導・支援の手立てを考えるなどの特別支援教育の専門的な内容に加え、現場の先生方と協働的・組織的に課題解決を行うファシリテーターとしての役目も経験し、中堅教員としての役割を意識しながら実習を行うことができた。また大学院で様々な校種の先生方と関わったり、実習Ⅰで違う校種の現場の実情を知ることができたりしたことで、県全体の課題を踏まえながら在籍校の課題を捉え、実習を行うことができた。」

○「研究の過程で立てた仮説を検証する上で、学校現場での生徒や教員の教育活動における実態把握、実践は不可欠である。今年度は、昨年度実施した質問紙調査をもとに、全体指導・個別指導に関わり、生徒の実態に即した教材や指導案を作成することができた。また、その取組を通して指導教員からの指導のもと、実習担当者や授業担当者と連携をとりながら、多様な視点から検討を重ねることができた。その過程で、教科教育・特別支援教育・教育相談における理論と実践の融合を学校現場において実現できたことが大変有意義であった。」

- 「授業実践をたくさんすることができ、自身の授業力向上にもつながる実習であった。また、客観的な視点で学校の実態を把握することができたので、生徒や他の先生方との関わり方もよい意味で変化したように思う。実習Ⅰでは気持ち的にもあまり余裕がなかったが、実習Ⅱでは少し余裕を持って実習に臨むことができた。」

○「自分の研究課題に即して、学校の協力のもと総合的な学習の時間を変えていく過程やその中から見えてくる課題等を分析することが、資質・能力の向上に役立っていくと感じている。」

「実習計画に沿って実習ができた」について

- 「実習の内容が巡回相談や研修が多かったので、実

習が始まってからの決定・変更は多かったが、基本的に計画に沿ってできていた。」

○「昨年度の研究の成果や課題が明確になっていたの
で、実習Ⅱでは、課題意識を持って計画立案し、実施
ができた。研究授業の準備では、少し日程調整が必要
になったものの、計画どおりに実施できた。」

○「日々忙しい現場の状況にもかかわらず、先生方の
快い協力や実習内容への賛同の下、計画通りの実習を
行うことができた。」

○「昨年度末に実習校において研究内容の中間報告を
し、今年度の実習計画を全教員に知ってもらえた。そ
のため実際に実習が始まる前に、事前の打ち合わせ会
を個別に行うことができ、綿密な実習計画を立てるこ
とができた。」

○「実習計画作成の段階で実習校と綿密な打ち合わせ
ができていたので、実習計画に沿って実習ができた。
授業内容については、生徒の様子や学級の様子を学級
担任と連絡を取りながら授業の展開などを修正するこ
ともできた。」

○「事前に担当教員と打ち合わせや内容をすりあわせ
ることで、ほぼ、実習計画に沿った実習を行うことが
できた。事前の打ち合わせや連絡調整の必要性を強く
感じている。」

○「日程的には概ね計画通りにできたが、介入内容と
しては当初計画していた方法から変更することもあっ
た。(協力してもらう以上無理は言えないので) また、
放課後の担任との協議が、日程変更になることはあっ
た。(放課後はいろいろな打ち合わせが入るので日程
を合わせるのが難しく、実習日以外になることも何回か
あった)」

○「学校現場の状況に応じて、また授業の入る学年の
そのときの様子に応じて、適宜変更した。実習計画は
提出のためと自分の研究デザインの大枠を自分自身で
確認するために作成した。」

○「実習内容は、対教員や対管理職、職員集団を対象
とするため、学校の都合を優先しなければならないの
で、細かいところまで計画できない。」

「実習以外の教職大学院の授業科目(ゼミ含む)との
関連を図って実習ができた」について

○「教職大学院の講義で学んだ新学習指導要領につい
ての知識を織り込みながら、全体講習を行ったり、若
年の授業作りのレクチャーを行ったりした。集中講義
で学んだマネジメントの理論学習や演習から学んだこ
とを、経営計画作成のマニュアル作成などに援用し
た。」

○「特に意識をして実習をしてはいなかったが、振り
返って関わっていたこと等あるなど思った。」

○「実習で必要となる内容に関して、授業で知識や技
術を得ることができた。実習と研究が連動するよう
に、ゼミでその都度確認することができた。」

○「昨年度は、講義において様々なことを学んだが、
実習Ⅰが始まると、担当の先生と定期的にゼミを行う
時間が確保できず、実習Ⅰの前半においては、講義の
内容が自分の実習の内容や実践と直接結びついていな
かったり、講義で学んだことの理解が十分でなかった。
後期の授業科目は、授業実践につながるものが多かつ
たが、実習Ⅰは11月で終わったので、後期の授業の内
容を十分に活かすことができなかつた。しかし今年度
は、定期的にゼミを行うことができ、昨年度の授業科
目、今年度前期の授業科目との関連をふまえて理論と
実践の融合という視点で実習ができた。」

○「アクティブ・ラーニング、構成主義の学習理論等、
初年度に授業で学んだ理論を、実習における授業実践
の研究に活かすことができた。また、入手したデータ
の分析についても、授業や大学の講座で学んだことを
活かすことができた。」

○「今年度は履修している授業が少なかったが、実習
Ⅱの中で先生方に校内研などで伝えた内容は、昨年度
大学院で学んだ知見を活用することができた。また今
年度も実習校の児童の課題を授業で取り上げ、検討し
ていく場面もあった。」

○「今年度は、M1も加わったゼミであったので、非
常に有意義なゼミとなった。また、実習で実施する授
業の指導案をゼミの中で多面的・多角的な視点でアド
バイスをもらうことができたので良かった。それぞれ

の実習先での授業を見合うこともできた。」

○「週1時間のゼミでは、実習内容の確認や助言により、実習につながる指導を受けることができた。」

○「ゼミでのアンケート作成や集中講義で学んだ内容を加味しながら、地域人材を活用した『総合的な学習の時間』を核とした地域連携・協働を意識しながら実習が行えた。」

「実習先の教職員と連携し、実習先の課題解決を図りながら実習ができた」について

○「取り組んだ実習課題全てにおいて、学校の実情を考慮に入れて行う必要がある内容であるため、連携は必須であり、実習校の教員の課題意識につながることを意図して実施できた。」

○「先生方の現状共有など、学校の現状も含めて考えていくことにつながった。」

○「指導教員にはその都度相談して助言を得ることができた。必要に応じて校務分掌の先生や授業担当の先生から情報提供や教材提供、ICT 機器を借りるなど、実習のための協力を得られた。」

○「研究対象授業でない時間帯では、実習先の課題に応じて、臨機応変に指導補助を行った。」

○「今年度は、昨年度の実習で教科担当者との関係ができていたので、お互いが課題を共有し、それに対して問題意識を明確にしながら実習が実施できた。」

○「実習で取り組んだ内容が在籍校の課題と直結していたため、先生方も主体的に実習内容に参加してくれた。実習での支援会議では、プロセスの中で対象とした子どもの行動変容が見られたことから、先生方が支援の効果を実感してくれ、この実践を継続していくための手立てを考えていこうとしている。」

○「実習担当者・教科担当者・SSW・教育相談担当者と個別に連携し、全体指導・個別指導における教材・指導案を作成することができた。またその過程で、研究課題を実習先の課題から捉え直し、課題解決につながるよう教材・指導案の作成につなげることができた。」

○「実習先の協力と理解がなければこの実習は成立し

なかったと思うので、実習先の先生方との連携は図れたと思っている。実習先の課題と自身の研究が合致していたことも実習が滞りなく実施できた理由だと思う。」

○「年度当初の職員会で昨年度の研究成果と課題、今年度の研究の内容などを実習先で伝えて実習Ⅱに入った。授業後の振り返りには、校長、実習担当（教頭）が入り授業についてのコメントをもらった。また、授業実践を行う学級担任や学年団の先生方との打合せも必ず行うようにした。」

○「校長や担当とは相談、報告を幾度も繰り返し連携を図ることができた。しかし学年の担任とは時間があまりとれず、綿密な打ち合わせができにくかった。次回の実習に向けての課題の一つである。学級担任との連携がとても大切だが、現場の忙しさが分かるだけに、遠慮してしまった。」

○「管理職や総合担当の教員と課題を共有し、協議しながら、地域人材を生かした『総合的な学習の時間』がより探求的なものとなるように実習を進めている。」

「高知県の教育課題を意識した実習ができた」について

○「研究仮説と実習課題は共に、県の総合教育会議で報告された課題を解決するものとして設定している。」

○「実習や授業を通して、高知県の課題を次第に意識した。」

○「教育振興計画で自分の研究と高知県の課題を定期的に確認しながら実習できた。」

○「研究内容と高知県の教育課題が大きく関連していることもあって、教育課題を意識した実習ができた。」

○「研究2年目となり、昨年からの課題意識がより具体的になり、その解決に向けた実践も昨年よりも具体的になっていると感じる。」

○「県及び文科省も課題として挙げている特別支援学校の教員の専門性の向上を意識して実践した。」

○「高知県高等学校の課題でもある不登校・中途退学・卒業後の早期離職への予防的生徒指導としての視点から、人間関係構築スキルの習得をめざしたソーシャル

スキルトレーニングを全体指導・個別指導に意識的に取り入れることができた。」

○「学校（現場）の課題が高知県の教育課題だと思って実習を行った。」

○「高知県の課題、高知市の課題、実習校の課題がそれぞれ違っているように見えても、根底は同じだと思う。そう考え意識してできた。」

○「中山間部における学校経営や地域の課題についても考えながら、『総合的な学習の時間』や地域コーディネーターに求められる役割が何であるのかを意識しながら実習に取り組んでいる。」

「土佐の皿鉢ゼミでは、それまでの実習の成果を発表することができた」について

○「発表したものは途中経過ではあったが、一定の研究の枠組みなどを示すことができた。」

○「1学期20日間の実習は質量ともに研究にとって大事な取組となり、その成果を発表することができた。発表後は、小学校教員、特別支援学校教員、教育委員会、管理職などと意見交換することができ、これからの特別支援教育相談活動を考える上で、実習で得たことは自分としては意義があると思っている。」

○「昨年度は、ポスターセッションがあまりイメージできていなかったが、他の教育学会などに参加したことで自分の発表のイメージがしっかりできた。また、発表要旨を作成したことでポスターも作成しやすく、日程的にも発表までの準備ができた。また皿鉢ゼミ自体が、昨年度の反省をもとに改善しながら開催していることも成果だと考えている。」

○「発表の仕方に慣れてきたこともあり、実習を踏まえ、何を重点的に伝えるべきかということが整理できるようになっている。」

○「今回の皿鉢ゼミでは、これまでの取組について成果だけでなく、課題についても話したことで参加者からも多様な角度からの意見を得た。今回得られた意見や、そこでのやり取りを無駄にすることなく活用し実習Ⅲをより充実させていくつもりである。」

○「8月の皿鉢ゼミでは、実習Ⅱでの実践内容を中心

に発表を行った。全体指導・個別指導での取組の有効性をみるため、根拠となる生徒の言動、教員からの報告をあらためて整理することで、実習Ⅲに向けての課題を明らかにすることができた。」

○「昨年の8月の発表と比較すると実習の成果を十分に発表することができた。」

○「成果と言えるかわからないが、やったこととその途中経過はまとめることができた。」

○「『総合的な学習の時間』に関するアンケートの結果から、学校としての取組の方向性を教員と生徒が共有できていることが見えてきた。一方、保護者の意識を変える取組の必要性が明らかになったという課題が見えてきたということは発表できた。しかし、十分に伝わる発表となっただけではなかったように感じている。発表の準備を事前に十分行っていきたい。」

○「できたと思うが、まだ不十分であったり、見えた課題があったりするのでも、指導教官にも自分からいろいろ聞いていくことを改めて思った。」

IV 考察

教職大学院における実習Ⅰから実習Ⅱに至る現状の分析から、院生の実習に対する様々な効果が見られた。

「実習に関して教職大学院からの説明・情報提供は十分なされていた」では、実習Ⅰを経験することにより実習Ⅱに見通しが持てたこと、オリエンテーションによりイメージを持って準備できたこと、実習校も慣れてきたので手続きや実習の流れ等で不明なことがなかったこと、実習Ⅱが、実習Ⅰとの違いを含め説明がされていたこと、実習の形態についても半日実習も可となったことなどがあげられ、スムーズに実習を実施できたことが明らかになった。カリキュラム評価の視点からは、昨年度の反省を生かして、カリキュラムの実施方法が改善されたと判断できる。

しかし実習校での情報伝達に不十分な部分も実際にあったようで、実習校にとって「すぐわかるような資料」を工夫するなど、院生からの提案事項についても考えていかなければならない。

「実習は、教員としての資質・能力の向上に役立つ

ものだった」では、設定した実習課題が学校現場で求められる技能やスキルに関するものなので、教員としての資質・能力の向上に役立つものであったこと、実習があることで教科指導力を高めたり生徒理解につながったこと、実習Ⅰの経験から実習Ⅱの課題や分析方法を見出したり見通しを持ったりすることができたこと、実習Ⅰより余裕をもって実習Ⅱに臨めたことなどが、院生自身の資質・能力の向上に役立っていくと感じていると推察された。カリキュラム評価の視点からは、現在の実習のカリキュラムが適切であると判断できる。

「実習計画に沿って実習ができた」では、特に実習Ⅱでは課題意識を持って計画立案した上で実施ができたこと、実習先の協力や実習内容への賛同の下、計画通りの実習を行うことができたことなどがあげられ、概ね基本的に計画に沿った実習を達成できていた。しかし、事前の打ち合わせや連絡調整の必要性を強く感じていたり、当初の計画からの変更もあったり、実習校の協力体制や多忙さから無理を言えない状況もうかがわれ、改善策を講じる必要が考えられた。カリキュラム評価の視点からは、院生の力量を生かした実習となっていると判断できるが、個別の事例に対応するという細かな方策も検討する余地があることが示された。

「実習以外の教職大学院の授業科目（ゼミ含む）との関連を図って実習ができた」では、教職大学院の講義で学んだ知識や集中講義で学んだことを経営計画作成に取り入れたこと、実習と研究の連動をゼミでその都度確認できたことなどがあげられ、教職大学院での講義やゼミと関連性を持って実習に臨めたことが理解できる。カリキュラム評価の視点からは、実習と座学が両輪となり、「理論と実践の融合」という教職大学院の目的を達成するために、効果的な教育活動が行われていると判断できる。

「実習先の教職員と連携し、実習先の課題解決を図りながら実習ができた」では、学校の実情を考慮に入れて実施できたこと、指導教員に相談して助言を得ながら必要に応じて他教員との情報提供や教材提供など

実習のための協力を得られたこと、実習先の課題に応じて臨機応変に指導補助を実施したことなどがあげられ、実習先の協力と理解がなければ実習は成立しなかったなど実習先の連携が図れていたことがうかがえる。しかし実習先の多忙さや担任との綿密な打ち合わせ時間の確保ができにくかったとの感想や、実習先の教員らに研究内容についてよく知られていないことがあるなどの課題があげられた。カリキュラム評価の視点からは、概ね実習先との連携が図れていると判断できる。これには、本教職大学院の実習コーディネーターの貢献があり、実習のカリキュラムの円滑な実施の鍵となっている。今回明らかになった課題は、院生、指導教員、実習コーディネーターで共有することにより改善を図っていきたい。

「高知県の教育課題を意識した実習ができた」では、実習や授業を通して高知県の課題を次第に意識できたこと、実習Ⅱでは課題意識がより具体的になり、その解決に向けた実践も昨年よりも具体的になっていること、高知県の課題は各地域での課題でもあり、実習校の課題がそれぞれ違っているように見えても根底は同じだと意識した実習ができたことなど、高知県の教育課題を常に意識した実習を実践してきたことがうかがえる。高知県の教育課題の解決が本教職大学院の使命である。その点を考慮すると、カリキュラム評価の視点からは、実習Ⅱの成果は高く評価できる。

「土佐の皿鉢ゼミでは、それまでの実習の成果を発表することができた」では、一定の研究の枠組みなどを示すことができたこと、発表してみて実習で得たことは自分としては意義があると認識できたこと、自分の発表のイメージがしっかりできたこと、昨年に比べて、発表の仕方に慣れてきたこともあり、実習を踏まえ重点的に伝えるべきことが整理できるようになっていること、これまでの取組について成果だけでなく課題についても話したことで参加者からも多様な角度からの意見を得られたこと、実習Ⅲに向けての課題を明らかにすることができたことなどがあげられ、有意義な発表であったことが推察された。教師教育のカリキュラムを改善していくためには、教師自身がアイデ

ンティティを形成する中で、研究や実習をどのように意味づけているかを把握し、その結果をカリキュラムに反映させていくことが求められる（浅野，2009）。土佐の皿鉢ゼミの院生の発表からは、理論に基づいた実践の分析により、自身の経験を省察し、アイデンティティを再形成していることが推察された。カリキュラム評価の視点からは、土佐の皿鉢ゼミが実習の成果を明確にするだけでなく、院生自身の成長に資する教育活動であったと評価できる。

上記の考察結果の中でも、次の3点に注目しておきたい。1点目は、「実習以外の教職大学院の授業科目（ゼミ含む）との関連を図って実習ができた」に関する。本項目に対するインタビュー調査のデータからは、講義科目やゼミと実習とが相互に結びつけられ、関連性を持って行われたことが確認できる。この点は、現在の科目展開やそこでの学びが「理論と実践の融合」という教職大学院の目的を達成するために、効果的な教育活動となっていることを示唆していよう。

2点目は、「実習先の教職員と連携し、実習先の課題解決を図りながら実習ができた」である。インタビュー調査のデータからは、指導教員に相談して助言を得ながら、実習先の課題に応じた臨機応変に実習と指導が行われたことを示している。院生の認知としての講義科目と実習の連携だけではなく、学校の課題解決場面における院生への実地指導をとおした専任教員の学術的・研究的知見の提供という側面からも、「理論と実践の融合」を図るカリキュラムとなっていたことがうかがえよう。

3点目が、「高知県の教育課題を意識した実習ができた」についてである。本専攻では、現職派遣院生が本専攻で高度な理論・学術的内容を学んだとしてもそれだけでは十分に役割を果たしているとは考えておらず、院生達が高知県の教育課題の解決と教育の向上とにコミットできて初めて役割を果たせると考えている。本専攻の「理論と実践の融合」とは、院生の大学院での学びにおいて両者が融合していることだけでは無く、高知県の教育課題解決という場面において、両者の学びの成果が発揮できることと考えている。イン

タビューデータは、高知県の教育課題を常に意識した実習を実践してきたことがうかがえ、この点からも、本専攻のカリキュラムが一定程度機能していることが示唆されよう。

本稿では、実習Ⅰと実習Ⅱのカリキュラム評価を行った。質問紙調査とインタビュー調査を通したカリキュラム評価により、実施されているカリキュラムの教育目標の達成状況を把握でき、達成されていない目標についてその原因を探ることができ、原因把握から改善への道筋を明確にでき（田中，2009）、これら3点についての具体的な把握ができた。カリキュラム評価を定期的実施し、今後も教員、院生及び実習コーディネーターが一致して本教職大学院の教育の質の向上に努めていきたい。

文 献

- 田中統治（2009）第1章 カリキュラム評価の必要性と意義 田中統治・根津朋実（編著）カリキュラム評価入門 勁草書房
- 浅野信彦（2009）第12章 教師教育のカリキュラム評価 田中統治・根津朋実（編著）カリキュラム評価入門 勁草書房
- 森 有希、岡田倫代、野村幸代、永野隆史、三好 文、柳林信彦（2019）「教職大学院における実習の現状に関する調査研究」高知大学学校教育研究、創刊号